明確な目標設定で実現してきた鉢花経営
～60歳で経営移譲できる体制づくり～

豊田市　　西尾 清二郎さん
施設花き（鉢花）

【平成 26 年 7 月 18 日掲載】

豊田市稲武町でシクラメンを始めとする鉢花を中心に栽培する西尾清二郎さんを紹介します。西尾さんは、経営の発展段階に応じて明確な目標を立て、農業経営を行ってきました。60歳を迎えた平成24年には、自らの目標どおり後継者である昌直さんに経営を移譲し、裏方として農園を支えています。また、西尾さんは海外農業研修生の派遣及び受入を推進する愛知県国際農友会の副会長を長年務めるとともに、海外の研修生を積極的に受け入れ、自らの農業経営を生かした国際交流を行ってきました。

人間としての基礎を作った海外研修

農園のシンボルにもなっている
ログハウスと西尾清二郎さん

水田作に林業と養蚕を組み合わせた中山間地の農家の長男として生まれた西尾さんは、親の勧めもあり農業高校から追進営農大学校（現農業大学校）に進学します。しかし、大学校進学後は、このまま外の世界も経験せずに就農してよいのかと悩みながら学生生活を送っていました。思い詰めた西尾さんは懇意にしていた大学校職員に退学の相談をします。その際、「こんな制度もあるから、焦らずに卒業を待て」と紹介されたのが卒業生を対象とした海外への農業者派遣事業でした。

大学校卒業後の昭和 48 年にアメリカに渡った西尾さんは、ロサンゼルス近郊の苗木農園で雇用を用いた大規模な農業経営を学びます。生産規模がまったく違うので、生産方式については参考になりませんでしたが、取引業者や雇用者との関わり方など経営者としての心得を学ぶことができたそうです。「調子のいいときもおごらず、人にかわいがられる人間」という西尾さんが理想とする人物像ができたのもこの時期でした。

試行錯誤を重ねた経営黎明期

昭和 49 年にアメリカから帰国した西尾さんが中山間地の狭い農地で高収益を確保するために選んだのが施設花きでした。当初はアメリカの農園で扱っていたアザレアを栽培していましたが、思ったような取引価格にならず厳しい毎日が続きます。その後も、小ギクやテッポウユリも導入しますが経営はなかなか安定しませんでした。しかし、昭和 53 年の結婚を機に導入したシクラメンが経営を好転させることになります。「物事が成功するかどうかは、自分の意識の問題。」と語るように、結婚したことで「スマートな農業を実現させたい。」との思いが強くなり、栽培に真剣に取り組むようになったそうです。

当時、平地ではシクラメン栽培は一般的になりつつありましたが、山間地での栽培事例はほとんどありませんでした。稲武の冷涼な気候は、苗の生育時には大きなアドバンテージとなりましたが、開花期を迎える秋以降は降雨が多く病害の対策に苦労したそうです。その後、農薬の散布方法の変更や山間地に適した品種の導入・開発などを経て、自らが理想とする鉢姿のシクラメンを出荷できるようになったそうです。

ゆとりある農業経営を目指した経営発展期

シクラメンの栽培を軌道に乗せた西尾さんが次に目標としたのが、ハウスの周年利用でした。シクラメンの出荷が終了する 12 月から４月までの期間にカンパニュラ、オダマキなど別の品目を栽培し、ハウスの利用効率の向上を目指しました。他品目の導入により、安定的な所得が得られるとともに年間を通じて雇用者の仕事を確保できるようになりました。熟練した雇用者を継続して活用することで、自らの仕事量にも余裕ができたそうです。

260 ㎡で開始した鉢花経営も雇用者を活用することで 5,000 ㎡まで拡大した。

従来から休日もなく働くことに疑問を感じていた西尾さんは、雇用者及び自身の勤務条件や報酬条件を明確化するため平成８年に農園を有限会社化します。これにより時間的にも金銭的にも会社と農園を区別することができるようになり、対外的な信用も高まったそうです。

後継者への経営移譲に向けた成熟期

西尾さんは、結婚当初から後継者への移譲を前提に農業経営を行ってきました。そのため、普段の家族の会話の中でも経営継承に関する話題を積極的に出してきました。また、50 歳を過ぎた頃から 60 歳で経営移譲することを目標とし、その時に向けて後継者とともに働く期間を意識的に設けて技術継承を行ってきました。目標どおり平成 24 年に 60 歳で経営を後継者の昌直さんに譲り、現在は、栽培管理の一部作業を手伝っています。

カンパニュラのオリジナル品種「カンパニュラ・ジュリ」

また、「恩人に恩を返すのは当たり前、自分が受けた恩をより多くの人に還元したい。」と語る西尾さんは、これまで海外や国内の研修生を積極的に受け入れてきました。「人が成長する姿を見ることができるのはもちろんだけど、生半可な知識では人に教えることはできない。自分自身の成長にもつながった。」と研修生を受け入れる意義を教えてくれました。

栽培管理を手伝う西尾さん

最後に「農園を手伝うのは２年程度にして、農業技術ボランティアとして海外に渡りたい。先日も（ボランティア派遣基準の）英検３級を若い子達に混じって受けてきた」と愉しそうに今後の目標を語ってくれました。

執　　筆：農業経営課
取材協力：豊田加茂農林水産事務所農業改良普及課

Copyright (C) 2014, Aichi Prefecture. All Rights Reserved.